

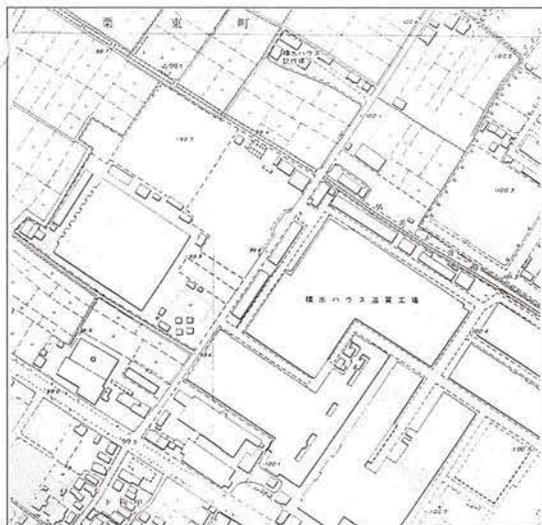
## 191. 中世墓の一形態

—栗東町野尻遺跡—

### 1. はじめに

野尻遺跡は過去の調査から、弥生時代中期後半以降を中心とする集落として周知されている。今回報告する中世墓は広範囲にわたる野尻遺跡の中でも地方道栗東・志那中線に近く、積水ハウス<sup>（株）</sup>滋賀工場の北側にあたる地区の調査で検出されたものである。当該地一帯は、町内では比較的大規模な工場が林立する地域であり、またJR琵琶湖線・栗東駅の新設に伴って道路の改良や造成が盛んである。発掘調査は平成2年と3年に行われ、中世墓は平成2年に実施された調査のもので、これ以外に古墳時代の溝とそこから勾玉・磨製石斧・須恵器、また近代から現代の耕作痕などが出土検出されている。平成3年は前年調査の隣地を対象に行われたもので前述の溝の続きが確認された。中世墓と同時期の遺物、遺構が発見されないこともあり、この墓が単独墓であった可能性はさらに高くなったといえる。

以下にこの中世墓の資料紹介と復元を試みたい。



遺跡位置図

### 2. 調査概要

平成2年の調査は大字下<sup>（町）</sup>鉤字樋ヶ上852、853番地面積1,627㎡を対象に行われた。周辺は旧葉山川の扇状地内に位置しており、下層からは河川の運んだであろう砂礫が点在することから、乱流であったことが窺える。

調査の結果、遺構面は一面でここに古墳時代から近代に至る遺構が重複している。古墳時代の溝は最大幅5m、深さ1.8mを測るもので調査地を東西方向に横断する。その他顕著な遺構は北部分の耕作痕で、残りの溝はその切り合い関係から古墳時代～平安時代という大まかな時代設定しかできない。中世墓は、調査地の南隅で検出され、ちょうど一本の溝に面するように見えるが実際には溝より新しいものである。粘質の強い土層であったが遺構の残りは良好で、復元図の作製となったものである。

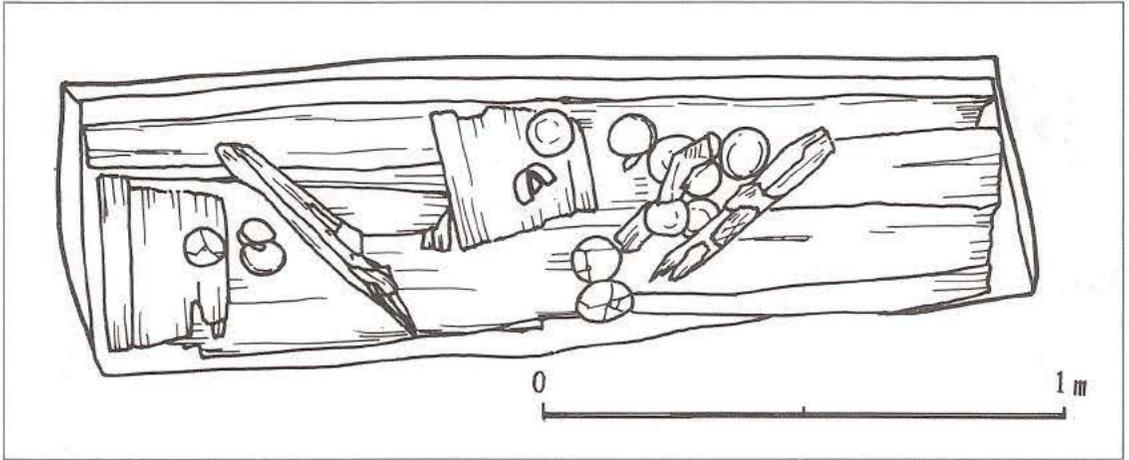
### 3. 木櫃墓

この中世墓を木櫃墓と呼んでいる。実際は「組み合わせ式木棺」なのであるが、まぎらわしい名称であるためこう仮称している。

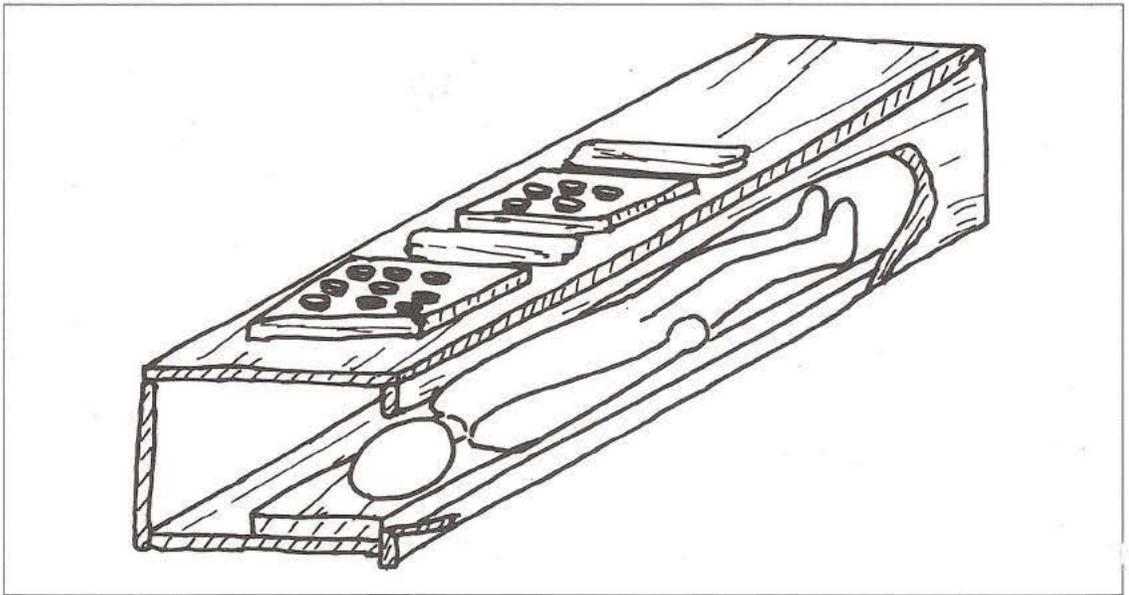
墓は長さ2m、幅0.5mの長方形のプランで板材は埋め込まれるように作られているために、これがそのまま棺の大きさでもある。棺内には骨が多少遺存しており、その頭蓋骨と膝蓋骨の位置から遺体は北東を枕にして埋葬されたことがわかる。土器は土師小皿14枚で、副葬が供献かその意図は不明だが棺上に置かれてあった。12世紀後半のもと思われる。その他には棺内外に遺物は認められない。棺を構成している板材は計6枚、長い方の側板を2枚土中にうち込むように据え、中に大小2枚の底板を重ねている。ただしこれは天井板のために写真では見えない。天井板は1枚の大きなもので出土状況では落ち込んで斜面を作っている。天井板の上には正方形に近い板材が2枚とそれと交互になるように桂状の木が2本置かれていた。土師皿はこの板、もしくは柱の上に置かれていたようである。このうち2点はススが付着しており灯明皿として用いられたと思われる。遺体が安置された底板の上には植物質のものが残り、遺体がむしろに包まれていたことも考えられる。

### 4. 類似例

参考資料として大津市・大通寺古墳群の平安古墳と島根県斐川町<sup>（町）</sup>・西石橋遺跡の中世墓をあげたい。大通



中世墓実測図



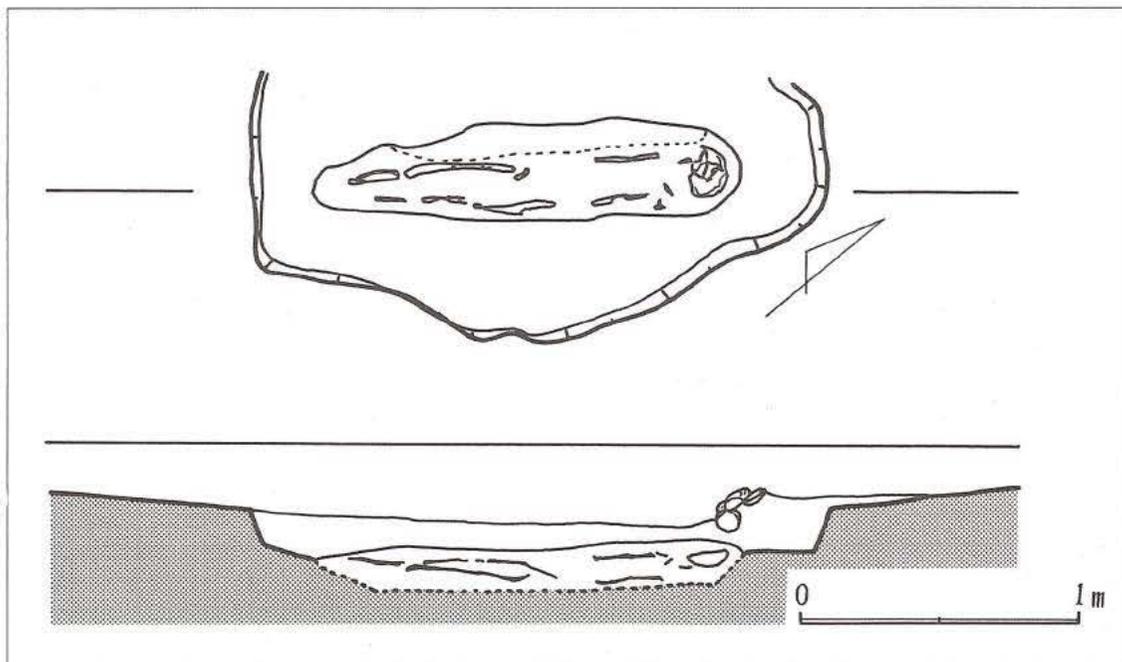
復元図



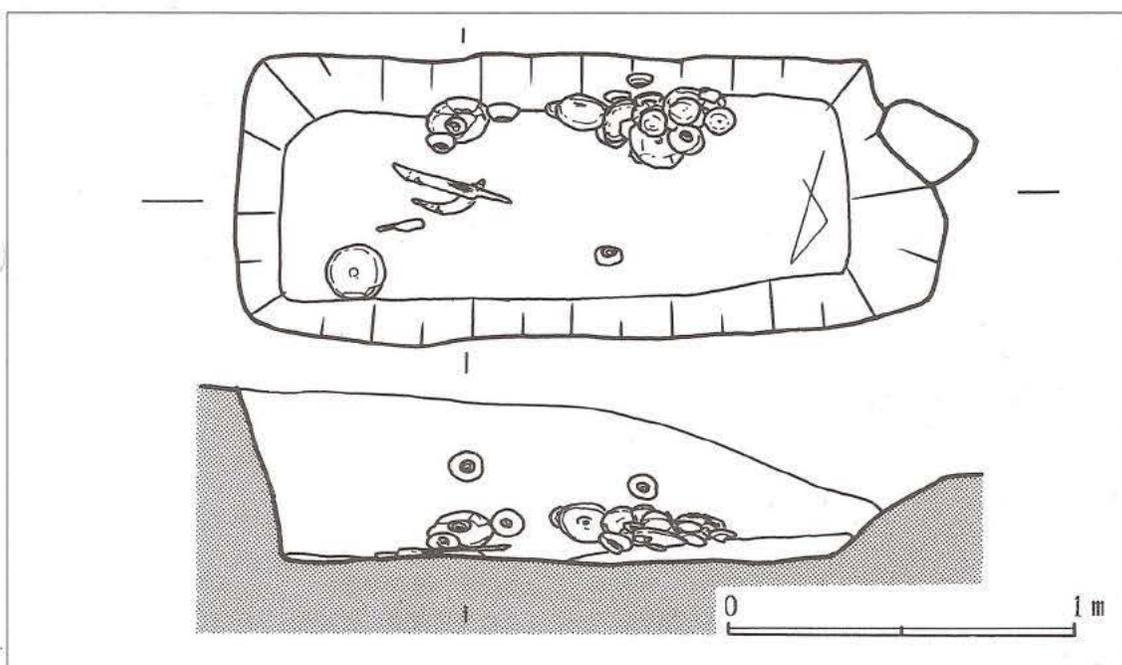
遺跡全景



中世墓出土状況



大津市・大通寺古墳群・平安古墳墓



島根県斐川町・西石橋遺跡・中世墓

寺古墳群の方は平安時代中期のもので野尻遺跡例とは時期的にひらきがある。しかしながらここでの類似点は「遺体を土で覆った後に、死者のために供献されていたもの」と考えられている土器である。土師器の小皿3枚、中皿1枚が遺体の頭部から出土しているもので、墓中の遺物は棺内もしくは遺体とともに発見される例が多いが、これを副葬品ということにすると、多少異なった意味をもつであろう遺物の出土状況（供献？）であるといえる。西石橋遺跡では「土師質土器杯6点小皿23点と短刀1点、鎌1点、不明鉄製品の鉄器3点が出土」し、このうち「杯1点が北東隅に、小皿1点が中央北側にそれぞれやや浮いた状態で出土している」という。またこの状態は報告者により、「鉄釘などの棺材は出土しなかったが、埋土が中央部分で落ち込んでいることや、土器の出土状況が前述したように上方からずれ落ちたと思われることなどから、例えば組合せ式木棺のようなものの存在を考えてもよいのではないだろうか」と考察がなされている。この中世墓は12～13世紀という年代付けがされているが、立地は丘陵の高所であったり、出土遺物が種類、数量ともに多いことなどから相違点は多いが、“浮いた状態”といわれる土器の出土はまさに棺土遺物を想定させるものであり、棺内外に遺物をもつこの墓もまた、中世の葬法を考えてゆくうえで貴重な例である。

## 5. 小結

これら3遺跡に見られる葬制について検討してみる。遺体の処理には火葬、土葬、風葬という大別があるが今回の場合は土葬である。これには当然、宗教的・慣習的概念が反映されている。それは死者を焼くことに対する忌避であったり、土に返したいという思いであったり、代々の習わしであったりするわけだが、そこに言及できるまで中世墓の研究はなされていない。まず、資料収集の段階であろうと思うが多少考慮してみたい。土葬であるといっても近世から現代に続くそのように死者を棺桶に入れて埋葬地まで運ぶ形ではないことが言える。平安古墓は土坑墓のようであるし、西石橋遺跡、野尻遺跡のものは木櫃であって持ち運べない。ここでは野辺送りと言われる、死者をその家から墓地へ運ぶ葬列は棺ではなしに別の容れ物(?)や縁者、知人が抱くなり背負うなりしたことを考えなくてはならない。またこのことは例えば現在では死者と生者の空間を棺に入れることで区分している。つまりは棺に入れられた時点から埋葬されるまでを一連の死者空間として捕えているが、かつては死者が家を出る時と埋葬される間にもうひとつの次元があったと考えるのである。死と生との境、混沌とした場の存在は中世に多い物語を思わせる。死後はまだ身体が暖かく、家人が葬式をできずにいると半年後に再生する話や、

意識を失っている間のできごとを覚えている男の話はそれを表したものと思える。埋葬地に着いた死者はここで、改めて棺に納められ死を確認されて旅立つのである。棺上にある皿や碗はその時の物であろう、生前愛用の品やその威厳を保とうとするものではない。

12～13世紀にはまだ仏壇、位牌が普及していたわけではなく、家の中においてその死者個人の依代はない。

別れはまさしく今生のものであり、個性を失った死者というのは全て“先祖”になってゆくのである。これについて思い合わされるものは屋敷墓である。屋敷墓は中世前期からの起源をもち、死者を家の屋敷内やその近く、または自家所有地に埋葬するもので、被葬者をその地の開発先祖と限ることが多いものである。

形態としては単独もしくは少数の墓で、共同墓地、墳墓群などとは明らかに意味するところが異なるものである。住居跡付近から検出されたらといってその家の先祖である可能性は探るべくもなく、野尻遺跡例ではその立地は平地で回りには家はない、また西石橋遺跡では高台の見晴らしのよい場所という条件にある。しかしながら墳墓群として認知される墓は集石を伴い、火葬を受け、蔵骨器を持ちというバリエーションが多いが、屋敷墓と思われるものは木棺墓例が多いようである。屋敷墓を先祖の埋葬地として捕える中で野尻遺跡例も考えてゆきたい。

## 6. おわりに

静岡県磐田市・一の谷中世墓群の発掘以来中世墓への関心は高くなり活発に論じられるようになってきた。

墓制と関係の深い宗教、特に仏教においては中世は多くの変革と充実を見せる、そしてその庶民への浸透度も顕著である。考古学による中世墓の調査は残念ながらまだ仏教史とダイレクトに繋がる線をもたないが中世史の、特に村落景観をふまえた墓の存在とともに、有機的関係を探ってゆくことが重要である。ともすれば“特殊”と言われる野尻遺跡のような例が研究の一助となり、また歴史の中での位置付けを与えられれば幸いである。

(橋本奈保子)

## 注

図版はそれぞれ下記から転載している。

○大津市・大通寺古墳群

「滋賀埋文ニュース」第114号、滋賀県埋蔵文化財センター 1989

○斐川町、西石橋遺跡

「古文化談叢」第18集、九州古文化研究会 1987